

今月の「病院の実力」は、呼吸器の病気を取り上げる。ぜんそくなど呼吸器の特病があると、風邪やインフルエンザに感染した際にも呼吸状態が悪化しやすい。日ごろからの治療が重要だ。

ぜんそくはアレルギーなどによって気道に慢性的な炎症が起きる。せきや「ゼーゼー」「ヒューヒュー」という呼吸音、息切れが特徴だ。ステロイドの吸入剤などによる治療を行う。

慢性閉塞性肺疾患（COPD）は、長年の喫煙の原因とする病気で、肺の組織が壊れ、息苦しくなり体を動かすことができなくなる。まず禁煙が治療の第一歩だ。重症のCOPDでは、在宅酸素療法を行うこともある。

このほか、呼吸器の病気には、肺がん、肺炎、幼児期の百日ぜきなどが原因となる気

呼吸器の病気

専門医受診で病名特定を

腎臓拡張症、肺結核などがある。せきなどの症状が似通い、同時に発症することもあり、専門医を受診して、どの病気を特定することが肝心だ。

読売新聞は今年7月、全国686の日本呼吸器学会の認定施設に対し、呼吸器科（呼吸器内科）の診療体制や2008年（または08年度）の治療実績をアンケートした。一覧表には同学会の専門医数と、1か月当たりのぜんそく、肺がん、COPDの新規患者数を示した。

日本医大教授（同大呼吸ケアクリニック所長）の木田厚瑞さんは「施設によってどの

病気の患者を多く診ているか特徴もみられ、病院選びの参考にしたい」としている。

千葉大 患者に合った投薬探る

千葉大付属病院では、ぜんそく、COPD患者一人ひとりに合った治療に取り組んでいる。ぜんそくの場合、症状が完全に安定していない患者には月一回、呼吸機能検査を行い、結果に応じて患者に適する薬を探す。同病院では、

「吸入剤以外に漢方薬なども取り入れている。投薬量も患者によって変わるため、投薬方法は無数にある。呼吸器内科科長の巖浩一郎教授は「発作を起さず、悪化しないようコントロールすることを心がけている」と治

療方針を語る。

また、県内では数少ないCOPD患者に対するリハビリテーションにも力を入れていく。リハビリテーション部と連携して、肺周囲の筋肉の使い方を訓練することで、有効的に使われていない肺機能を引き出すことを目標にする。苦しくて動けないと訴えていた患者が、日常生活で支障がなくなるほど改善するケースがあるという。

巖教授は「呼吸器の病気は生活習慣病と変わらない。治療法が定まれば、地域の医療機関で受診するほうが患者には便利だ。今後、専門医と地域の医療機関の病診連携が大切」と話している。

病院の実力「呼吸器の病気」

医療機関別2008年治療実績
(読売新聞調べ)

医療機関名	日本呼吸器学会 専門医(人)	新規患者 (人)		
		ぜんそく	肺がん	COPD
	8	8	8	4
	5	13	10	10
	4	22	8	16
	4	5	11	4
	4	9	1	1
	4	-	-	-
	3	48	7	29
	3	25	6	12
	2	65	10	37
	2	69	11	10
	2	13	8	17
千葉徳洲会	2	26	6	4
	1	3	2	2
	1	-	33	0
	1	0	20	0
	9	12	28	4
	6	6	6	4
	5	-	-	-
	3	98	22	31
	3	44	54	9
	3	19	14	1
	2	10	5	3
	2	-	-	-
	1	125	64	9
	1	25	6	3
	1	-	-	-
	1	約13	約7	約7
	8	-	-	-
	6	21	21	1
	5	-	-	-
	3	0	18	0
	1	15	20	5
	1	7	21	8
	1	約5	約5	約3

「国・」は独立行政法人国立病院機構、「セ」はセンター。「-」は未回答。
※1) 初診時に診断がついたケース。
※2) 同じ患者で複数の病気がある場合も含む

*全国の調査結果は「暮らし健康面」に掲載しています。次回は12月6日「痛みの治療」の予定です。